Title	中村菊男君を憶う
Sub Title	
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.8 (1977. 8) ,p.93- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770815-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その後、本年三月に私が定年で退職するまでの三十年間、私は法学部の同僚として中村君と親しい交際をつづけてきた。教授会その他において、中村君は学内行政に関し、同君独特の理論にもとづく正々堂々の議論をしばしば展開された。正論を主張する者が、一部の人々からけむたい目で見られることは、一般社会の通弊であり、学校という社会もまたその例外ではない。中村君の身辺に、そうした雰囲気があつたことは否めない。しかし、中村君が、その速筆を縦横に駆使してものされた夥しい分量の学問的労作が——それは一学者の業績としては驚異的分量である——わが法学部の誇りであることは、何人もこれを否定しえない敢然たる事実である。中村君の死は、法学部にとつては、寔にかけがえのない有力メンバーの一人を失つたことを意味し、いかに嘆いても嘆き切れない重大な損失である。

(六月二十日記)

中村菊男君を憶う

内山正熊

昭和十八年十月、中村君と僕とは同時に法学部助手になった。いわゆる同期の桜である。ちょうどその頃、戦争は酷で、学徒動員で学生は殆んど姿を消して行き、戦時下の三田の山で、国民服にゲートルをはいて、われわれは一緒に助手生活を送つた仲間である。その彼は、僕より早く散つて行つた。

中村君は堂々たる体格で、当然軍隊に入るところだったが、特に選ばれて文部省特別研究生となつたので、軍務を免れたのである。彼は、その恩師板倉卓造先生の御眼鏡にかなつて、大卒卒業と同時に助手となつた。板倉先生は、「中村君は筋がいい」といわれていたが、事実若い頃から政治学者として大家のような風格をもつていた。彼には、政治家ないし政治学者らしい資質が充満していた。談論風発、颯爽としていた彼は、程なく押しも押されぬ塾政治科の花形教授となつた。

助手時代のことだから、もう三十五年も前になる。あるとき、僕の家に遊びに来て、信夫淳平博士の「近世外交史」をも

つて来てくれた。彼は、僕が林毅陸先生の外交史の本はもつていても、信夫先生の本をもつていないのを知つて、その愛蔵の書物の中から貸してくれたのである。一見豪放なように見えて、こまやかな神経の持主で、実に折目正しいひとであつた。彼は、自分より年上だということで僕をいつも「さん」づけで呼び、それは他人行儀のようであつて、彼がいうと不思議に親しく感ぜられた。

中村君は、つとに、政治学界において塾を代表する存在となり、その著述、演説などで華々しい活躍をつづけて、政治学者としての地位を確立した。ここ数年、めつきり衰えて弱々しい姿になつたけれども、二、三十年前の中村君は、胸を張り肩をいからせ、いつも昂然としていたのが目に浮ぶ。やや甲高い黄色い声の名調子での話しぶりは未だに耳に残つている。その演説口調は、いかにも政壇向きで、事実彼は、戦後第一回の国会選挙では、郷里三重から打つて出て、善戦の末惜しくも落選したが、それは彼の政治学研究に実践的色彩を濃くし、その研究対象に選挙や世論などが加えられて精彩をそえた。恐らく、学者として大成することを彼自身期していたであらうが、心の中では、同郷の大先輩尾崎行雄の後継を以て任じ、いつの日にか政治家として雄飛するのを夢みていたのではなかつたらうか。彼の知友、教える子には、政界で名を成している者が少くないが、そ

れだけに晩年の彼は、かつての抱負を思い起して感慨深かつたにちがいない。お通夜の供花には、自由民主党、内閣総理大臣の供物があつたのは、奇しくもその心事を象徴するものであつたと思う。政界とのつながりといえば、民主社会党のブレイン・トラストとして著名であつたけれども、彼は、本来伊勢の出身だけに体質的に国粋主義的などころがあつたから、民主社会主義への傾斜があつたとしても、民主党の担い手というよりも、本質的には、自民党の流れに近かつたのではないかと思われる。

学者としての中村君は、精力的に全くよく書くので、筆の立たない僕には羨しい限りであつた。恐らく、小泉信三先生や高橋誠一郎先生の超弩級とを除けば、塾の中でも彼は第一列に位置する多作な学者であつた。その点では寡作の僕は、中村君の足許にも及ばなかつたけれども、ただしかし、助教授になつて僕が処女作を出すことが出来たのは、彼のお蔭だと今は感謝にたえない。それは、戦後数年ならずして、彼が「政治学」の著作を出したことが大きな刺激になつて、僕も遅ればせながら、「国際政治学序説」を書きあげたからである。尤も、彼の方はほとんどん書物、評論、随筆などを出して行くので、僕の方はもう到底太刀打ちなど出来るものでなかつた。いかに専門がちがうとはいえ、彼の遅しさにはかなわず、いつしか彼とは張り合ふ気もなく

なつた。同時に学究としてスタートしながら、ぐんぐんリードされると、ライバル意識など出ようがなかつたといつていい。しかしこの對抗意識が噴出したことが一度だけあつた。

かれこれ十年近くなるが、それは中村君が法学研究四十三巻十二号に、「日米安全保障条約論―内山正熊教授の中立論批判」と題する論文を突如発表したからである。中村君と僕とは研究室も隣り合せなのに、この問題についてそれまで何一つ話しがなかつた。そこで僕もついエキサイトしてしまい、直ちにそれに対する反論を法学研究四四巻四号に、「日本における中立主義の生長について―中村菊男教授の批判に答える―」という形で発表した。その内容にわたることはここでは避けるが、これが中村君の気に痛くさわつたと見え、廊下で会つたとき明らかに激怒の色を見せた。僕は、彼に、再反論するならば、まず僕の論文をよく読んでからにして貰いたい、そして学問的論争にして、中立政策論議はやめて貰いたいと切言した。すると、彼はしばらくして、僕の論文をよく読んでくれたと見え、「反論を書くのはやめました」と静かに言われたのには驚いた。これを機会に、僕も彼の書いたものをよく読むようになったし、彼もまた僕に近づいて来たように思われる。一寸した冗談も彼の口からきけるようになった。この一件で、二人が仲たがいにしなかつたのは幸いだつたが、何といつてもあれは僕には痛い思い出

ある。しかしあの覇気満々だつた彼が急に僕にやさしくなつたのは、そろそろ体が悪くなりかけていたからではなからうか。その頃から、彼がふらりと僕の部屋に入つて来るようになり、新しく出した本などももつて来てくれた。旧い研究室の頃には、あまり行き来もしなかつたのに、新研究室に来てからは、隣りのせいもあつて、よく顔を合わせ、何かと話し合うようになった。僕の一寸したことを彼が喜んでくれたのも、今は悲しい思い出である。体の衰えが目立つようになってからは、健康の話が多かつたが、ごく最近も心に残る会話を交した。

それは、この五月八日、塾長候補者選出のために、一緒に五一七番教室へ行く前のことだつた。雑談の末に、僕がふと口にした言葉は、「もし君が体をこわしていなかつたら、ここで君は出るところだつたな」ということであつた。それは全くお世辞などではなく、自然に出て来たのだつたが、これを聞いた中村君は、「ははは」と力なく笑つた。その笑い声は、心なしに弱々しかつた。彼が同感の意を表するときは、「そうだ、そうだ」と手を一寸あげた得意のポーズで合植を打つのに、あのときはどういふのか、下を向いたまゝだつた。彼は何を感じたのだろうか。今更そんなことはいふな、もう自分はこの世のことはもうあまりかかわりたくないのだという達観した気持だつたのだろうか。晩年の淋しそうに見えた彼に、僕は励まし役などとまで

は行かなくとも、同情役、慰め役ぐらいではあつたかも知れない。

中村君は、まだ五十七だというのに、この世から去つて行つた。しかし、その生涯を雄々しく勇往邁進して、ポリティシャンの業績を数多く残して行つたことは、彼らしかつたと思う。逝去の数日前、幻の門の近くで中村君が愛弟子と楽しげに語り合いながら、桜の木の下を歩いて来るのを見た。その弟子たちは、みな立派に君のあとをついでいる。それは何よりの慰めであらう。

中村君、この世では余りに忙しかつた君だ、いま安らかに眠れよ。

中村菊男君追想記

梅原日郎

追想——

そう、君は死んだんだ。
今は、もうこの世には居ないんだ。

あの穏かだつた君の死顔も、僕の脳裏に強く焼付いて居る。そして又、君がタッタ今、息を引取つて、既に空しく白いシートのみになつたベッドを無性に叩いて、やる方ない憤懣に涙したのも事実なんだ。

そして焼場で君の骨を拾つた事も——

しかし、君が死んだという実感が湧かないのはどうした事か？

今にも君から電話が掛つて来る様な気がしてならない。

先日「慶應大学法学部の中村教授から御電話です。」と女子社員から受話機を渡された時は、本当に一瞬錯覚を覚えた。

それは中村勝範教授から、君の思い出話しを書く様に、との依頼の電話であつた。

引受けてはみたものの、君の追想の記を書かねばならないなんて——

ペンを取る度に、色々の思い出が走馬灯の様に脳裏をよぎり、涙ばかり出て来て一向に纏まらないではないか。

どうしてこんなに早く、アツと云う間に逝つて了つたんだ。

五月二十九日に、二人で熱海に行くべく、宿も、往復の汽車の切符も、すつかり希望通りに手配して置いたのに。

その旨の電話を掛け終つて、十日も経たない間に死んで了うなんて。